

ノープリウスとは全く形態が異なり、カシラエビ類は後者の形態に属する。従って、鯉脚類は甲殻類の主流から早くに分離した枝であり、カシラエビ類と一括した亜綱に含めるのは正しくない。軟甲類が比較的早く分枝したことはクルマエビ類のノープリウス以後の肢の形態とカシラエビ類のそれと類似することからも実証される。

軟甲類の中で、コノハエビ類の次に分枝した群は口脚類である。発生経過中に端細胞環の形成、中腸・胚葉の形成、第7腹節の形成、第1胸節の頭域からの分類など、コノハエビ類と口脚類を結びつける要素は多い。またフクロエビ類は他類とはややかけはなれた発生過程を示す。

系統発生を意識の上で新しい手法で甲殻類の発生を見なおしたならば、さらに系統発生を正しいものにするのが可能であろう。

比較発生学からみたクモ類の系統

吉倉 真(熊本大・理・生)

クモ類各目にわたっての発生学的研究が十分でないので、これによって系統を考え、妥当な見解をだすことは困難である。ここでは現在の知識をもとにし、主として発生上の事実 30 項目に着目して論議を進める。クモ類の起原を腿口類の広翼類に求めることは一般に認められているが、現在の腿口類すなわちカプトガニに発生上共通点の最も多いものはサソリ類である。ついでムチサソリ類、ヒヨケムシ類となっている。Bristowe (1958) はクモ類を *Merosotomata* (腿口類), *Pectinifera* (サソリ類のみ), *Epectinata* (サソリ類以外のクモ類全部) の 3 亜綱に分けたが、発生上からみてもサソリ類には特異な点多く、これを 1 亜綱とすることは妥当と思われる。*Pectinifera* は卵胎生一胎生への道を進んだが、*Epectinata* は卵胎生一卵生への道を進んだ。*Epectinata* の原的なものは、その卵大きく、胚はみな側器を備えていたが、部類の特殊化が進むにつれ小さな卵を産むようになり、胚は側器を失った。*Epectinata* からはムチサソリ類とヒヨケムシ類とが分岐し、前者からは真正クモ類がでたものと思われる。事実、発生上からみてムチサソリ類と真正クモ類との共通点は極めて多く、これらの胚はみな卵

歯を有する。一方、ヒヨケムシ類からはメクラグモ類とダニ類が分岐したものと思われ、これらのものには胚に前記のごとき卵歯を欠く。真正クモ類、ダニ類、メクラグモ類はクモ類中最も特殊化の進んだもので、形態は多様、生活圏はひろく、種類が多い。カムシ類は発生上ダニ類とサソリ類とに共通点が多いが、発生に特異な点が多く、その系統を推定することは困難である。ただその性行動がサソリ類、ムチサソリ類と同様なことは強く興味をひく。このことからカムシ類は *Epectinata* の原的なあるものから、ムチサソリ類とは別に独自の道を進んで特殊化したものと考えられる。

II-2 寄生と共生 (動物分類学会シンポジウム)

オルガナイザー: 馬渡静夫(資源研)

「寄生と共生」というテーマについては当初 6 名の演者を予定し各方面よりの検討を行いたいと企画したが、時間の制限のため限られた内容に終わったことは残念であった。但し、椎野氏の講演は寄生に伴う形態変化に関して多くの資料を駆使しての発表であり、三宅氏のそれは共生の種間関係と生態関係の面からの内容であり、これを一步すすめて生理的面から追求されたものが平井氏の講演であって一応寄生と共生についての問題点を打ち出し得たものと思える。多数の方が終始熱心に聴講され、多くの有益な質疑応答が行われたことはオルガナイザーとして感謝に耐えないところである。

寄生性甲殻類における寄生適応

椎野季雄(三重県立大・水産)

寄生という特異な生活への適応は次の諸点にあらわれる。

- 1) 体の扁平化、短縮化、それに伴う体節の退化、付属肢の減少消失。(例, *Caligoida*, *Entoniscidae*)
- 2) 栄養に恵まれることに伴う体の巨大化(例, 寄生性等脚類)
- 3) 内部寄生虫における多数化、小形化、および外部寄生虫における卵の小數化、大形化。